

俺は朝鮮人ばかりの車室の入り口の扉に脊を凭せて誰も這入れない様にぐわん張り通した。

驛夫が用事ありげに前方の扉をあけて這入つて來ると睨み返した。

朝鮮人は俺が騒ぐので眠れないので不平らしくフクレてゐた。

何だつて彼奴はあそこで見張りをしてゐるのか。

俺は亡國の民の爲に亡命せんとしてゐる亡者だ。

兵庫へ着いた。

亡者はバスケットを提げて、地下足袋はだしで汽車を降りた。

開札口で途中下車の判を押して呉れる。

すると俺を大泥棒か、國事犯の脱走かと思つたのだらう。亡國の民が七八人續いて汽車を飛び

降りて開札口へ押しかけた。

俺は素早く梶棒を上げた車に乗つて、車夫に坂神電車の停留場までと命じた。

『まだ夜は明けなから通つてやしませんよ』と車夫は言つた。

何は兎もあれ、六甲嵐は寒い。